

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和元年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第6号（9月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401

南さつま市金峰町大野 2200

TEL 099-245-1081（代表）

099-245-1157（直通）

099-245-1149（FAX）

テレホンサービス

鹿児島 099-296-6430

296-6431

ホームページアドレス：<http://www.jpnpn.ne.jp/kagoshima>

メールアドレス：[nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp](mailto:nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp)

**農薬の安全使用に努めましょう**

**農薬安全使用五つの柱**

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理，安全使用
2. 作物に対する安全 適期，適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給  
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止  
(周辺住民等への危被害防止)  
(河川，湖沼，海などへの汚染防止)  
(養蚕，養蜂などへの危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

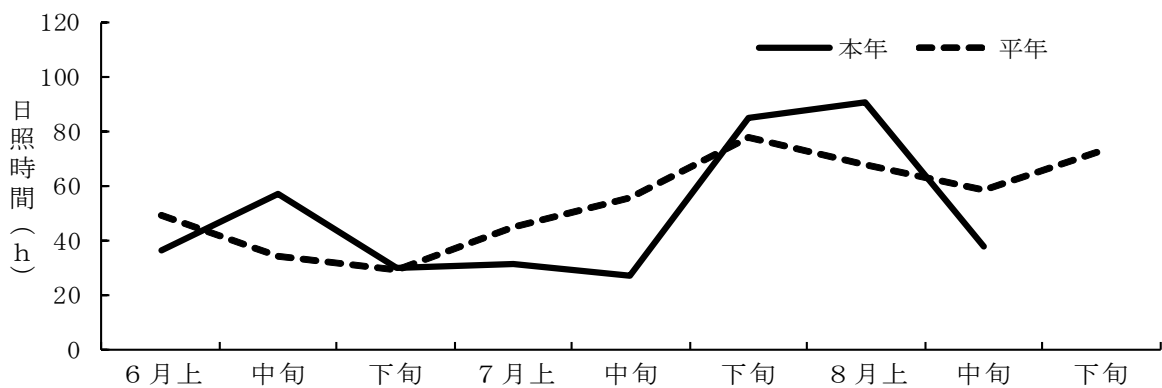
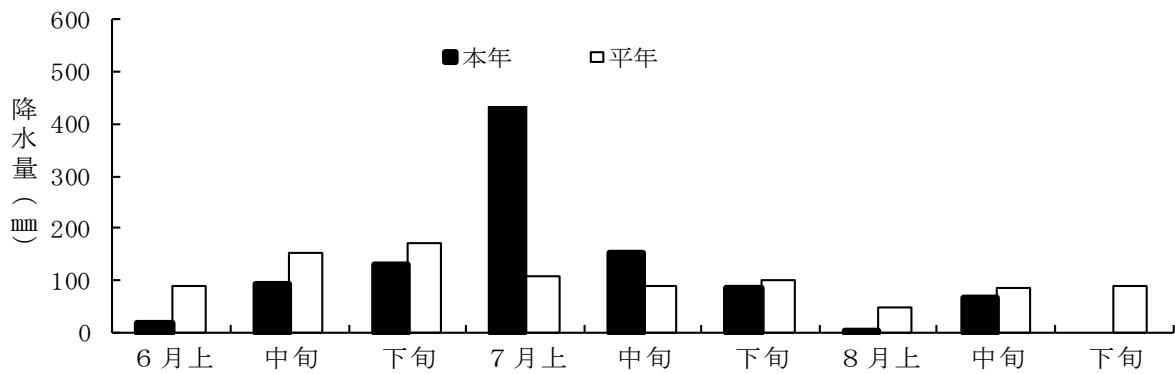
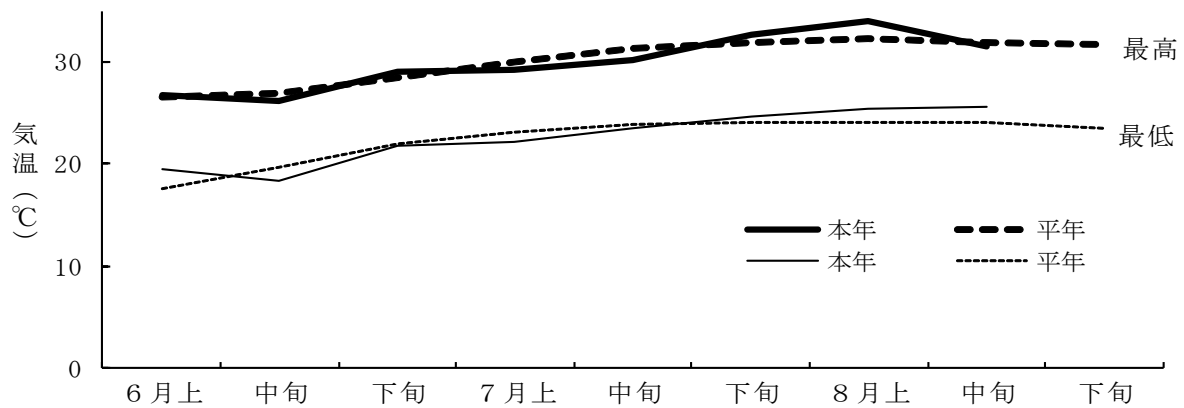
**農薬ラベルを確認しましょう。**  
**農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう。**

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（8月31日から9月30日） 令和元年8月29日 鹿児島地方气象台 発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	20	40	40	九州南部では、気温は平年並みか高く、降水量と日照時間は平年並みの見込み。奄美地方では、気温は高く、降水量は平年並みか少なく、日照時間は平年並みか多い見込み。
	奄美地方	20	30	50	
降水量	九州南部	30	30	40	
	奄美地方	40	40	20	
日照時間	九州南部	40	30	30	
	奄美地方	20	40	40	

II. 6～8月の気象情報（鹿児島地方气象台 観測点：加世田）



## 【病害虫発生予報の概要】

作物		病害虫名		発生量	
				現況	予報
普通作物	普通期水稻	いもち病（穂いもち）		やや少	やや少
		紋枯病		並	並
		トビイロウンカ		やや多	やや多
	サツマイモ	ナカジロシタバ		並	並
野菜	イチゴ（苗床）	炭疽病		やや多	やや多
	サトイモ	疫病		並	並
	ダイズ・野菜・花き共通	ハスモンヨトウ		やや多	やや多
花き	キク	ハダニ類（県本土：施設）		並	並
		アザミウマ類（県本土：施設）		多	多
果樹	カンキツ	かいよう病（県本土・熊毛地域）		少	やや少
		〃（奄美地域）		やや少	やや少
		黒点病（県本土・熊毛地域）		やや少	やや少
		〃（奄美地域）		並	並
	ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）		やや少	やや少	
	〃（奄美地域）		並	並	
	果樹共通	果樹カメムシ類	ツヤアオカメムシ	やや少	並
			チャバネアオカメムシ	並	多
茶樹	チャ	炭疽病		並	やや多
		網もち病		並	やや多
		チャノコカクモンハマキ		並	並
		チャハマキ		並	やや多
		チャノミドリヒメヨコバイ		やや多	やや多
		チャノキイロアザミウマ		並	並
		カンザワハダニ		やや多	やや多
		クワシロカイガラムシ		並	並

## 【 病 害 虫 発 生 予 報 】

### I. 普通作物

#### 1. 普通期水稻

##### (1) いもち病 (穂いもち)

###### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 やや少

###### イ 予報の根拠

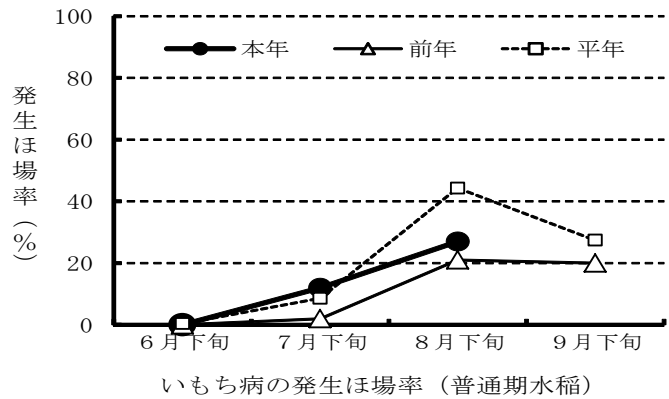
(ア) 調査結果 発生量：やや少

葉いもちの発生ほ場率

27% (平年45%)：やや低い (-)

###### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 常発地等で葉いもちの発生が多いほ場では、穂揃期に液剤又は粉剤で補完防除を行う。



##### (2) 紋枯病

###### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 並

###### イ 予報の根拠

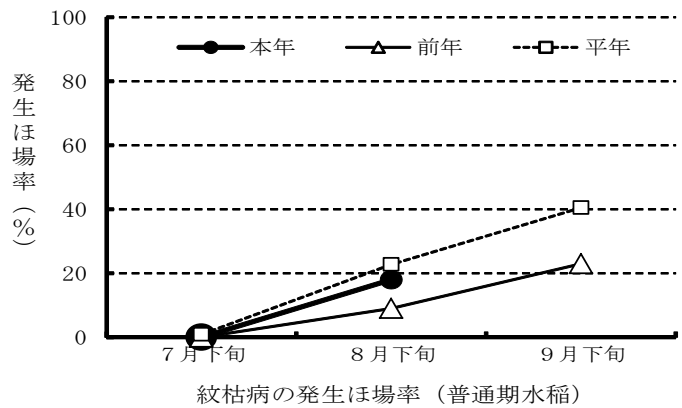
(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率18% (平年23%)：並

###### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 現在発生が認められているほ場で出穂後も病勢が進展する場合は、早急に液剤又は粉剤で防除する。

(イ) 昨年多発したほ場では、特に注意する。



##### (3) トビイロウンカ (令和元年度発生予察注意報第1号(8月29日付け)参照)

###### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 やや多

###### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率59% (平年60%)：並

発生程度の高いほ場を認めた (+)

定点ほ場(無防除)での株当たり成幼虫数45.1頭(8月23日調査)：多(+)

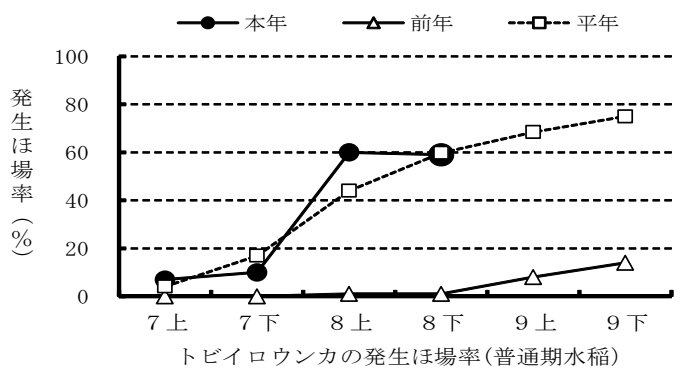
###### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発生ほ場では、7月13～15日飛来虫に由来する第2世代幼虫の防除(防除適期：8月30日～9月4日)を徹底する(図1参照)。

(イ) 育苗箱施薬剤を使用していないか、使用していてもウンカ類に効果が高い新剤のトリフルメゾピリム剤を使っていない場合、並びに飼料用稲については、今後も本虫の発生密度が高まる可能性が高いので、特に注意する。

(ウ) 中～晩生品種は収穫期までの期間がまだ長く、坪枯れ被害を生じる危険性が高いことから、特に注意する。

(エ) 発生状況は地域やほ場によって差があるので、防除にあたってはほ場毎に確認し、発生を認めた場合は早急に防除する。



(オ) 本虫は稲の株元に生息するので、粉剤や液剤で防除する場合は、薬剤が株元に十分届くよう散布する。

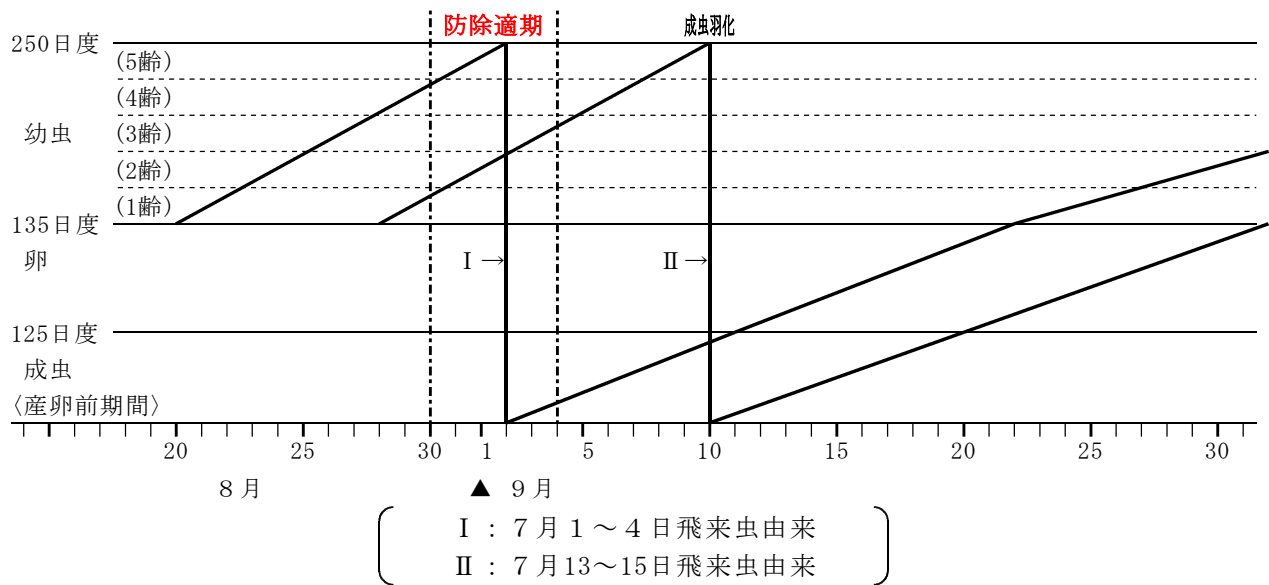


図1 有効積算温度利用によるトビイロウンカの発生経過予測図

令和元年8月27日作成, アメダス(加世田)の気温データを使用

## 2. サツマイモ

### (1) ナカジロシタバ

#### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 並

#### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率50% (平年69%)：並

糖蜜トラップでの誘殺虫数 (7月~8月中旬 162頭(平年 617頭))：少 (-)

#### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 未展開葉での食害が認められ、若齢幼虫が多くみられる時期に防除する。

(イ) 薬剤散布後も幼虫の発生量が多い場合は追加防除を行う。

(ウ) ハスモンヨトウの発生が見られる場合は同時防除が可能である。

#### ナカジロシタバ誘殺状況 (農業開発総合センター大隅支場 糖蜜トラップ)

月旬	本年	平年	H30	29	28	27	26	25	24	23	22	21
7上	5	91	27	0	191	455	3	90	69	73	1	3
7中	16	84	27	7	222	312	10	56	85	37	73	10
7下	44	98	305	83	337	67	18	14	29	105	21	3
7月計	65	273	359	90	750	834	31	160	183	215	95	16
8上	6	206	236	71	186	179	27	183	198	610	220	145
8中	91	138	104	102	85	43	103	21	263	227	336	93
8下		382	700	136	338	150	156	380	420	624	766	152
8月計	( 97 )	726	1040	309	609	372	286	584	881	1461	1322	390

※( )内の数値は8月上・中旬の合計。平年はH21~30の平均値。

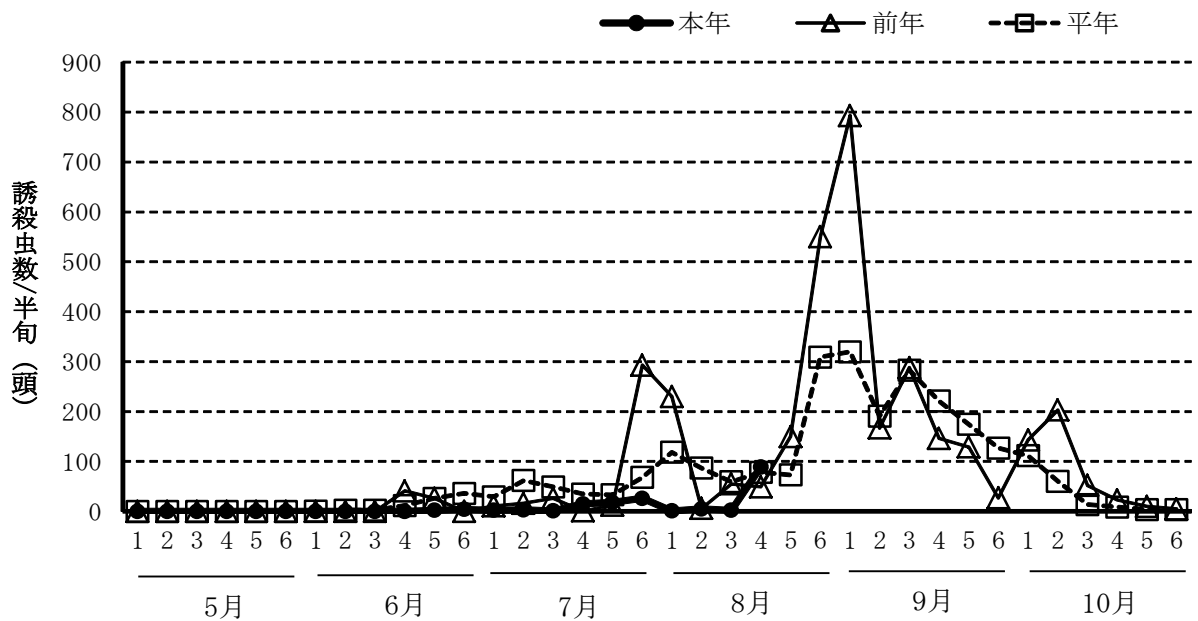


図1 糖蜜トラップでのナカジロシタバの誘殺状況  
 調査場所：農業開発総合センター大隅支場（鹿屋市 串良町 細山田）  
 ※ 調査データは半旬毎に集計した。

## II. 野菜

### 1. イチゴ（苗床）

#### (1) 炭疽病

##### ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや多

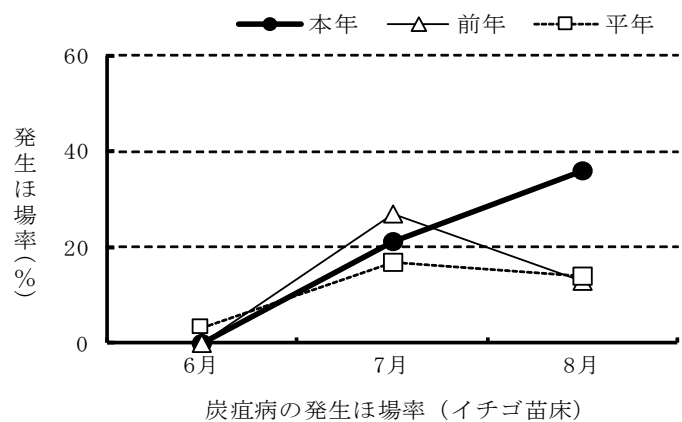
##### イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多  
発生ほ場率36%（平年14%）  
：高い（+）

発生程度が低い（-）

##### ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 雨よけ，排水対策及び防風対策を徹底する。灌水はできるだけ水滴が小さくなる灌水チューブ等を用い，適正な水管理に努める。
- (イ) 古葉は潜在感染している場合が多いので，新葉展開後は降雨時を避けて摘葉する。
- (ウ) 萎凋した苗は，早急に除去し，ほ場外で適切に処分する。
- (エ) 薬剤による予防散布は10～14日間隔で行い，株元，葉裏などに十分量を散布する。発生が認められた場合は散布間隔を短縮する。
- (オ) 地床育苗では，ビニールマルチ等で降雨等による土のはね返りを防止する。
- (カ) 育苗ほ場周辺や育苗ベンチ下の除草を徹底する。



2. サトイモ

(1) 疫病

ア 予報内容

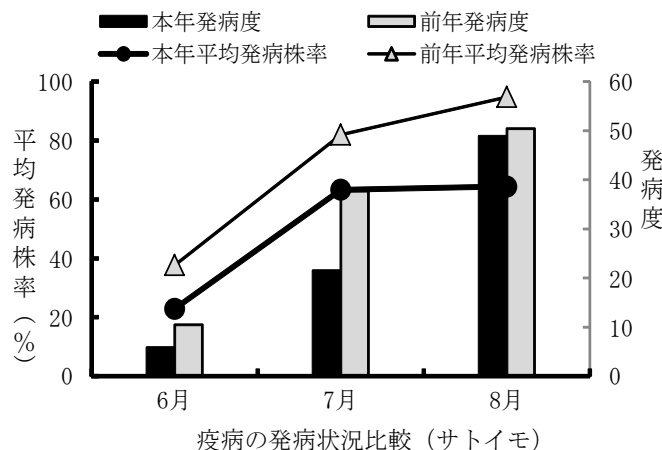
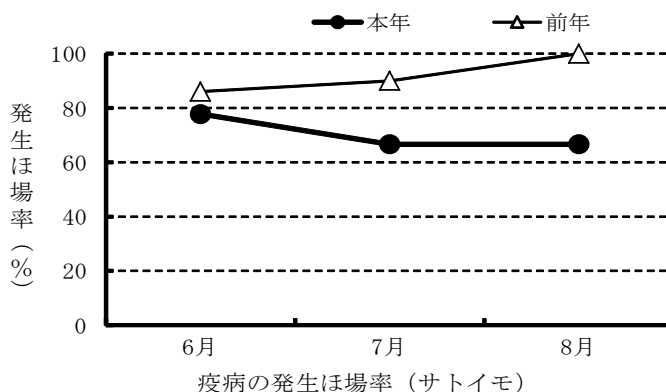
- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並  
発生ほ場率67% (前年100%)  
平均発病株率64.4% (94.8%)  
平均発病度48.9 (前年50.5)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 前年発生したほ場では発病する可能性が高いので、注意する。
- (イ) 降雨が続くと急激に発生が拡大するので、薬剤散布は予防を主体とする。
- (ウ) 未発生ほ場では発生の有無をこまめに観察し、発生を確認したら直ちにアミスター20フロアブルを7日間隔で2回散布する。
- (エ) 高温時の薬剤散布や、雨の合間においても散布後の急激な日照は、薬害の発生を助長する恐れがあるので、ジーフライン水和剤等を使用する場合、薬剤防除時の気象動向に注意する。
- (オ) 薬剤散布後、葉が長時間濡れた状態に置かれると薬害の発生を助長する恐れがあるので、散布は葉が速やかに乾く時間帯を選ぶ。
- (カ) 発病茎葉は発生源となるので、ほ場外へ持ち出し適正に処分する。
- (キ) 排水の悪いほ場では多発しやすいので、長時間の滞水を避けるよう、対策を十分に行う。



3. ダイズ・野菜・花き共通

(1) ハスモンヨトウ (令和元年度技術情報第2号(8月29日付け)参照)

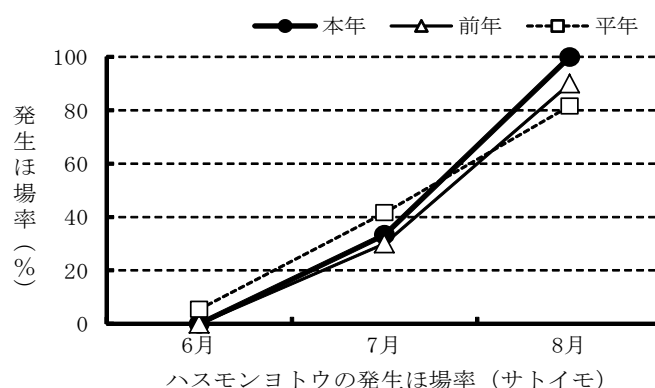
ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作物 ダイズ, サツマイモ, イチゴ, サトイモ, 根深ネギ, キャベツ, マメ類, キク等

(ウ) 発生量 やや多

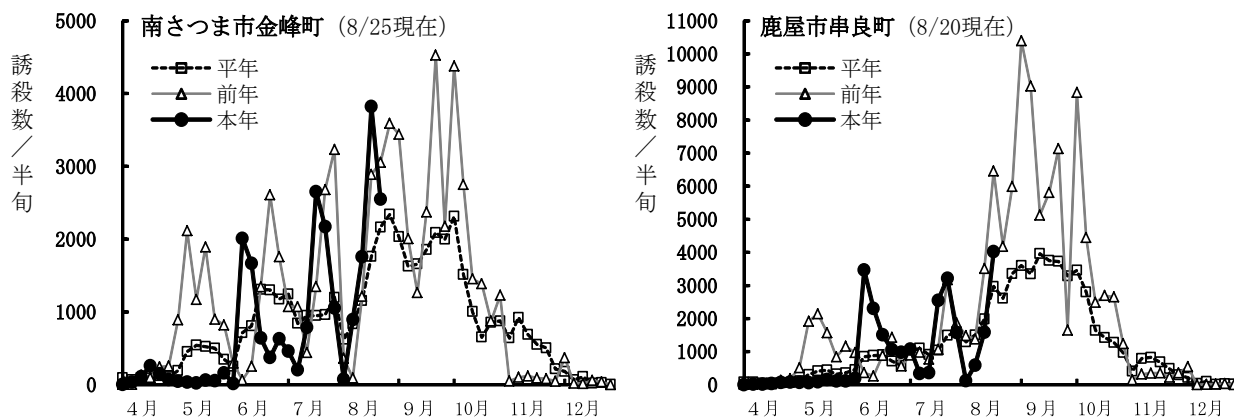
イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多  
ダイズでの発生ほ場率92% (平年74%)：やや多 (+)  
サツマイモでの発生ほ場率 4% (平年6%)：並  
イチゴでの発生ほ場率 21% (平年18%)：並  
サトイモでの発生ほ場率100% (平年82%)：やや多 (+)  
キクでの被害発生ほ場率 32% (平年12%)：多 (+)  
フェロモントラップ誘殺数：やや多 (+)



## ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発生状況は、作物や各地域で異なるため、ほ場を見回り、幼虫の発生状況を確認する。
- (イ) 若齢幼虫は集団で表皮だけを残して食害（白変葉）するので、発生を目安にする。
- (ウ) 卵塊や若齢幼虫が寄生している葉は、見つけ次第摘み取り処分する。
- (エ) 中・老齢幼虫になると薬剤が効きにくいので、防除は若齢幼虫の多い時期に行う。



フェロモントラップによるハスモンヨトウの誘殺状況

## 防除に関する今月の留意事項

### 1. イチゴ（苗床）

本ぼでの病害虫の発生は苗からの持ち込みによることが多いことから、苗床での防除を十分に行う必要があるため、以下の防除対策を徹底する。

#### (1) うどんこ病

- ア 本病が発生しやすい葉裏をよく観察し、早期発見に努め、薬剤が十分かかるように初期防除を行う。
- イ 雨よけ育苗施設では発生が多くなる傾向にある。
- ウ 発病葉や古葉は除去し、ほ場外へ持ち出して処分する。
- エ 薬剤によっては感受性が低下している可能性があるため、散布後は防除効果を確認する。
- オ 同一系統薬剤の連用を避け、系統や作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

#### (2) ハダニ類

- ア 管理作業時に注意深く観察し、初期防除に努める。
- イ 寄生葉や摘葉した葉は、ほ場外に持ち出し処分する。
- ウ 薬剤の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから、葉裏にかかるよう丁寧に散布する。
- エ 薬剤感受性の低下を防ぐため同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。

### 2. サトイモ

#### (1) 疫病

一部地域では甚発生ほ場が確認されている。減収を抑制するため、防除を徹底する。また、次年度作の発病を抑制するため、ほ場内菌密度の低減を図る。収穫後はくずいも・親いも等の残渣処分を徹底する。

- ア 降雨が続くと病勢が急激に伸展するので降雨状況に留意し、耕種・物理的防除法も組み合わせ収穫までの防除を徹底する。
- イ くずいも・親いも等の残渣は、ほ場や周囲に残ると野良イモとなって翌年の発生源となるため、収穫時にほ場外へ持ち出し適正に処分する。併せて収穫後には、発病茎葉を含めた残渣を早めにすき込み分解させる。



### Ⅲ. 花き（キク）

#### (1) ハダニ類

##### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土(施設)

(イ) 発生量 並

##### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率37%（平年43%）

：やや低い（－）

発生程度の高いほ場を認めた（＋）

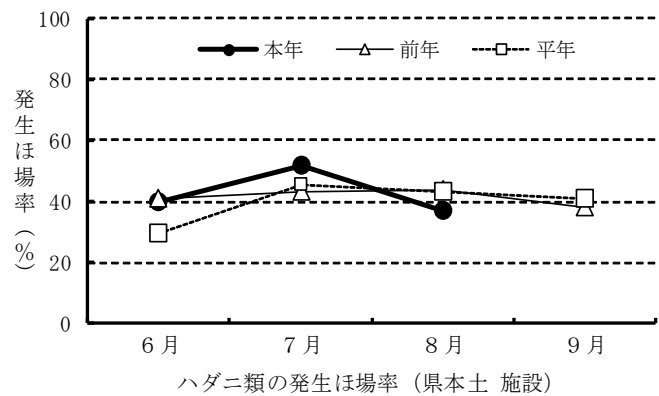
##### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生する機会が多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と初期防除に努める。

(イ) ほ場内と周辺の雑草や収穫後の残さ等は早めに除去し、適正に処分する。

(ウ) 薬剤は葉裏までよくかかるように散布する。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



#### (2) アザミウマ類

##### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土(施設)

(イ) 発生量 多

##### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率42%（平年24%）

：高い（＋）

##### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) アザミウマ類はキクえそ病(TSWV)、キク茎えそ病(CSNV)を媒介する。

(イ) 母株や苗の導入に際しては、アザミウマ類の寄生やウイルス感染に細心の注意を払う。

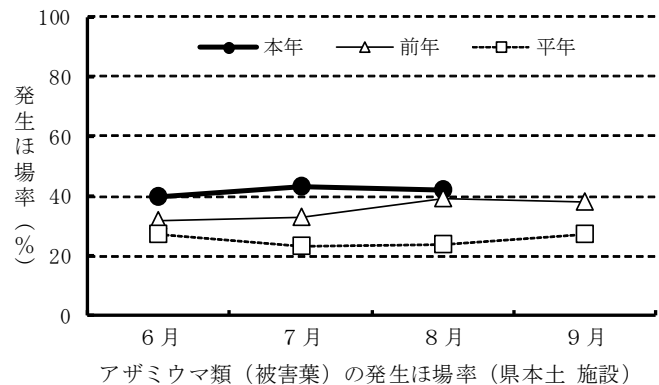
(ウ) ハウスの開口部には目合い0.6mm以下の防虫ネットを張る。

(エ) ハウスの開口部等に青色粘着トラップを設置し、早期発見と初期防除に努める。

(オ) 除草等の環境整備を行うとともに、母株の防除を徹底する。

(カ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(キ) 栽培終了後は、速やかに残渣を処分する。



#### IV. 果 樹

##### 1. カンキツ

###### (1) かいよう病

###### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

###### (イ) 発生量

県本土・熊毛地域(果実) やや少

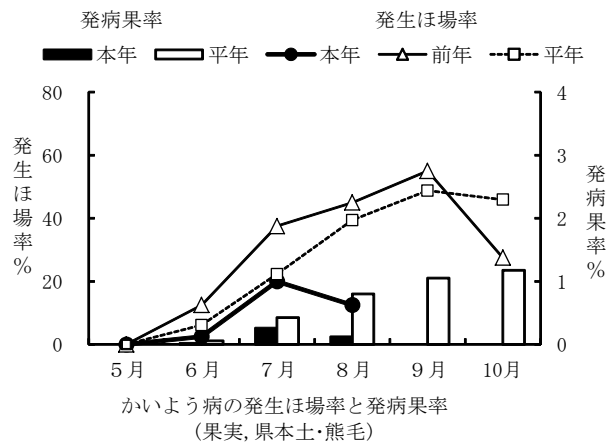
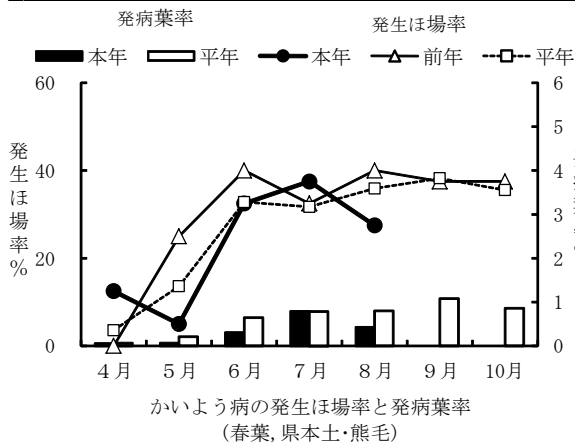
奄美地域(果実) やや少

###### イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

###### (ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	やや少	少
発生ほ場率	28% (平年 36%) : やや低い (-)	13% (平年 39%) : 低い (-)
発病率	0.4% (平年0.8%) : やや低い (-)	0.1% (平年0.8%) : 低い (-)



ミカンハモグリガの発生ほ場率93% (平年82%) : やや高い (+)

<奄美地域>

###### (ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	やや少	やや少
発生ほ場率	0% (平年 13%) : やや低い (-)	0% (平年 26%) : やや低い (-)
発病率	0% (平年0.3%) : やや低い (-)	0% (平年0.7%) : やや低い (-)

###### (イ) 気象予報

降水量 : 平年並みか少ない (-)

###### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) ミカンハモグリガの食入痕から感染しやすいので、ミカンハモグリガの防除を徹底する。

(イ) 台風の風傷害により発生が多くなることが予想されるので、台風前の防除を徹底する。

(2) 黒点病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 やや少

奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 15% (平年 39%)

: 低い (-)

発病果率 1.9% (平年 3.5%)

: やや低い (-)

発生程度の高いほ場を認めた (+)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 0% (平年 6%) : 並

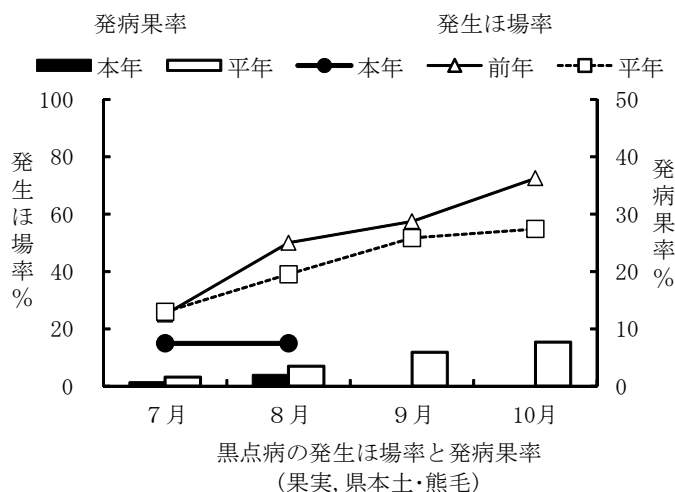
発病果率 0% (平年 0.6%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 後期黒点病対策として、多雨が予想される場合には予防散布を行う。

(イ) 薬剤の残効は降水量と散布後日数の影響を受ける。このため、次の散布は累積降水量250～300mmに達する時期を目安に行う。ただし、累積降水量がこれより少なくても1か月程度経過したら次の散布を行う。

(ウ) 伝染源となる枯れ枝はこまめにせん除し、せん定くずは園外に持ち出して処分する。



(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 やや少

奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 15% (平年 35%)

: 低い (-)

寄生葉率 0.5% (平年 4.6%)

: やや低い (-)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量：並

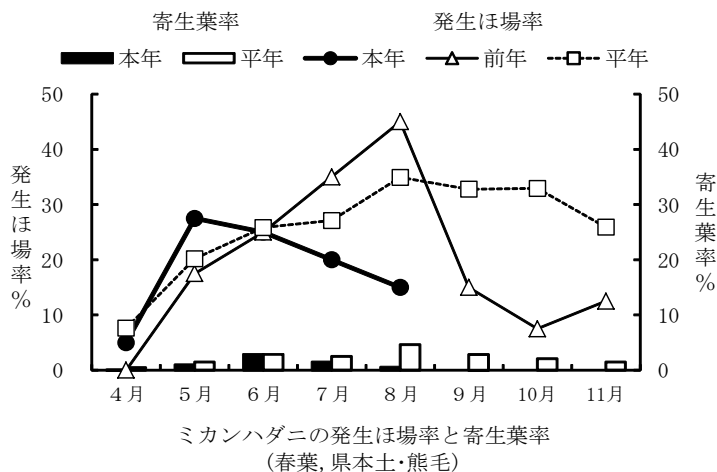
発生ほ場率 0% (平年 6%) : 並

寄生葉率 0% (平年 0.1%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 1葉当たり雌成虫数0.5～1.0頭(寄生葉率で30～40%)を目安に防除する。

(イ) 同一系統薬剤の使用は年1回とし、葉裏までかかるように丁寧に散布する。



(4) 果樹カメムシ類 (ツヤアオカメムシ, チャバネアオカメムシ)

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土  
 (イ) 発生量 ツヤアオカメムシ 並  
 チャバネアオカメムシ 多  
 (ウ) 飛来時期 遅い

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

予察灯の誘殺虫数, 8月第1~4半旬の合計 (単位: 頭)

調査地点	ツヤアオカメムシ			チャバネアオカメムシ		
	本年 (R1)	前年 (H30)	平年	本年 (R1)	前年 (H30)	平年
南さつま市金峰町	145	490	250	298	239	325
南さつま市加世田唐仁原	108	223	180	95	98	235
いちき串木野市湊町	50	79	140	207	154	153
出水市美原町	213	473	580	1,831	280	1,442
鹿屋市串良町	91	189	143	696	58	17
誘殺虫数	やや少 (-)			並		

寄主植物 (スギ・ヒノキ) の球果量が平年より多い地域がある (+)

注) 球果量指数は, 南薩 (スギ42.9 (平年32.8), ヒノキ52.4 (平年40.1)), 北薩 (含む伊佐)

(スギ40.6 (平年33.5), ヒノキ61.2 (平年44.3)), 始良 (スギ34.9 (平年30.6), ヒノキ61.9 (平年41.1)), 大隅 (スギ48.2 (平年29.6), ヒノキ31.9 (平年35.3))

ヒノキ球果の寄生虫数 (8月後期) (単位: 頭/5枝)

成虫・幼虫	ツヤアオカメムシ			チャバネアオカメムシ		
	本年 (R1)	前年 (H30)	平年	本年 (R1)	前年 (H30)	平年
成虫	0.12	0.00	0.19	2.76	0.63	1.06
幼虫	0.00	0.00	0.07	0.12	0.10	0.31
寄生虫数	やや少 (-)			多 (+)		

注) 8月後期のチャバネアオカメムシ成虫数(頭/5枝)は, いちき串木野3.2, さつま町:2.4, 阿久根市:2.2, 出水市:6.0, 霧島市:0.0。

ヒノキ球果の吸汁痕数 (口針鞘数) の推移 (単位: 本/果)

調査年	7月		8月		9月		飛来時期
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	
本年	—	0.5	4.8	5.4			遅い
前年	0.9	10.5	17.8	21.7	27.3	27.4	早い
平年	0.2	2.7	6.5	11.5	16.2	20.3	並

注) 8月後期の口針鞘数(本/果)は, いちき串木野市:6.4, さつま町:2.4, 阿久根市:5.9, 出水市:10.4, 霧島市:2.1。

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 果樹カメムシ類の飛来は地域間差, ほ場間差があるため, こまめに園内外をよく見回り, 飛来を認めたら直ちに防除する。  
 (イ) チャバネアオカメムシが多い。今後, ヒノキ球果等が吸汁加害により餌として適さなくなり, 他の餌を求めて果樹園に移動することが予想されるため注意する。

防除に関する今月の留意事項

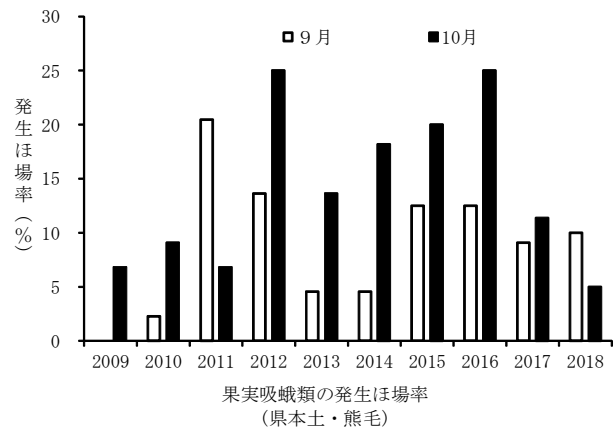
1. カンキツ

(1) 果実吸蛾類

果実吸蛾類は果実を吸汁・加害し腐敗落果させる。夜間に活動し果皮の薄い早生温州等に集まりやすい。年によっては異常飛来により大きな被害を受けるので注意を要する。

- ア 網目0.5～1.0cmの防蛾網で被覆する。
- イ 幼虫の食草となるアケビ、ムベ、アオツツラフジ等を極力除去する。

- ウ 毎年、被害が多いほ場では、ほ場全体が1 Lux以上の明るさになるように蛍光灯を集団点灯する。



(2) サビダニ類

サビダニ類は果実を加害する害虫で、生態や薬剤感受性の異なるミカンサビダニとリュウキュウミカンサビダニの両種が生息する。

- ア 県内のほぼ全域に生息するリュウキュウミカンサビダニは、秋季以降も果実上で加害し続けるので、被害果を認めたら直ちに防除する。
- イ 昨年秋季に多発したほ場では、同じほ場で発生する機会が多いので、防除に努める。

## V. 茶 樹

### (1) 炭疽病

#### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや多

#### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率45% (平年52%)

：やや低い (-)

1 m<sup>2</sup>当たり病葉数15.1枚 (平年6.6枚)

：多 (+)

定点無防除園での病葉数(8月中旬) 66枚/m<sup>2</sup> (平年96.7枚/m<sup>2</sup>)：やや少 (-)

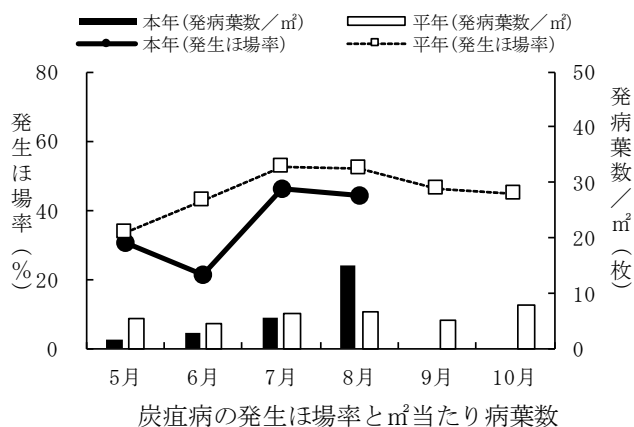
(イ) 気象要因 (鹿児島地方気象台データ：加世田)

8月後半の降雨日数が多い 降雨日数(8/16~26)：8日/11日 (+)

#### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 秋芽での発生は、翌年の一番茶の収量や品質の低下を招き、翌年の発生源になる。

(イ) 秋芽3葉期頃にSBI剤等治療効果の高い薬剤で防除を行う。



### (2) 網もち病

#### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや多

#### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率2% (平年1%)：並

1 m<sup>2</sup>当たり病葉数0.1枚 (平年0.03枚)：多 (+)

(イ) 気象要因 (鹿児島地方気象台データ：加世田)

8月後半の降雨日数が多い 降雨日数(8/16~26)：8日/11日 (+)

#### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 本病は、越夏病葉が伝染源となり、多湿条件が続くと多発する。

(イ) 常発園では9月上旬までに防除する。

(ウ) 遅場地帯、深刈園、四番茶摘採園では、秋芽3葉期頃に炭疽病との同時防除が可能である。

### (3) チャノコカクモンハマキ, チャハマキ

#### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 チャノコカクモンハマキ 並                      チャハマキ やや多

(ウ) 発生時期 チャノコカクモンハマキ 並                      チャハマキ 並

#### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 (8月中旬)

	チャノコカクモンハマキ	チャハマキ
<b>【巡回調査】</b>		
発生量	並	並
発生ほ場率	13% (平年11%)：並	13% (平年10%)：並
虫数(1 m <sup>2</sup> 当たり)	0.4頭 (平年0.5頭)：並	0.3頭 (平年0.4頭)：並
<b>【定点調査】(フェロモントラップ)</b>		
第2世代誘殺数	320頭 (平年474.8頭)：並	253頭 (平年185.5頭)：やや多(+)
第2世代50%誘殺日	7/26 (平年7/27)：並	8/1 (平年7/30)：並

#### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発生状況は地域によって差があるので、ほ場での発生状況を把握する。

- (イ) 防除適期は発蛾最盛日の7～10日後（ふ化～2齢期）である。
- (ウ) 近年，秋期に発生が多い傾向にあるので注意する。
- (エ) 地域によってはチャハマキのジアミド系薬剤に対する感受性が低下している事例もあることから，薬剤の選定に当たっては地域の管理暦に準ずる。

(4) チャノミドリヒメヨコバイ，チャノキイロアザミウマ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 チャノミドリヒメヨコバイ やや多  
チャノキイロアザミウマ 並

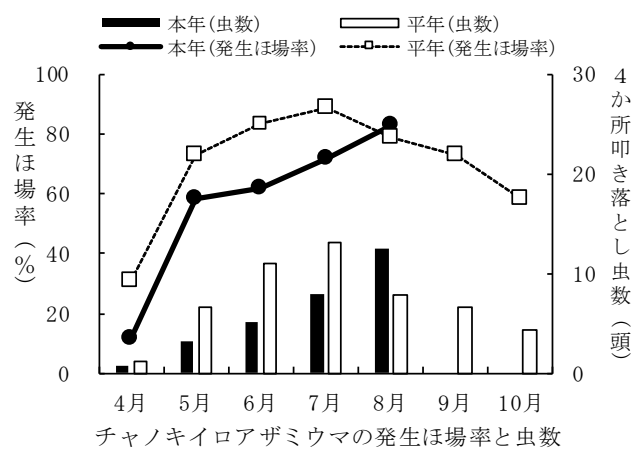
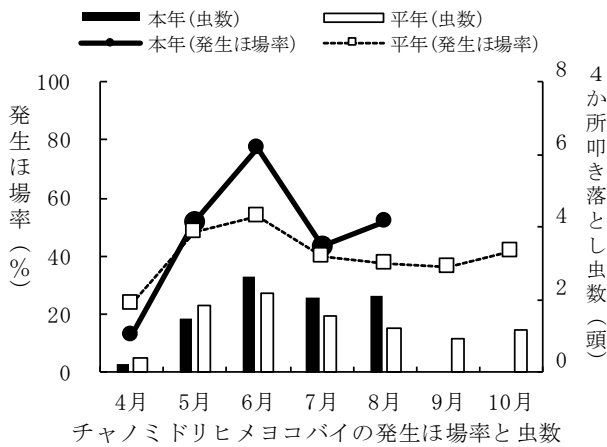
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果(8月中旬)

	チャノミドリヒメヨコバイ	チャノキイロアザミウマ
【巡回調査】		
発生量	やや多	並
発生ほ場率	52% (平年38%) : やや高い(+)	83% (平年79%) : 並
虫数(4か所叩き落とし)	2.1頭(平年1.2頭) : 多(+)	12.5頭(平年7.9頭) : 多(+)
【定点調査 無防除園】		
虫数(50回すくい取り・たたき落とし)	7頭(平年6.8頭) : 並	17頭(平年13.8頭) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 秋芽での被害は，翌年の一番茶の収量や品質に大きく影響するので，3葉期頃に残効の長い薬剤で2回目の防除を行う。
- (イ) 更新園や幼木園では，新芽の伸長期間が長いので被害が継続し，樹体への影響も大きいので，芽の生育状態に合わせた防除に心がける。



(5) カンザワハダニ

ア 予報内容

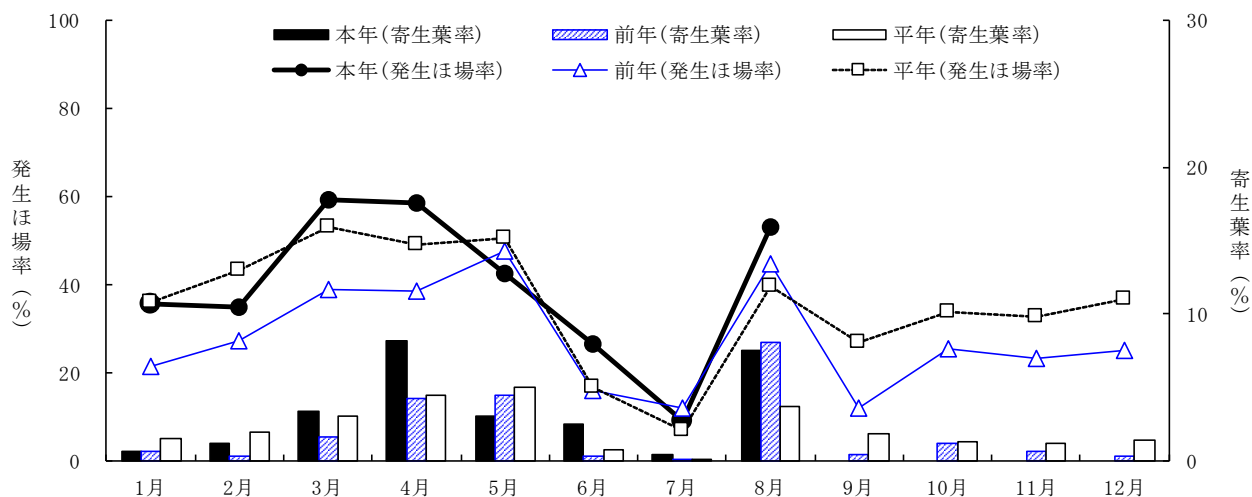
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多  
発生ほ場率 53% (平年40%) : やや高い(+)  
寄生葉率7.6% (平年3.7%) : 高い(+)  
定点無防除園の寄生葉率(8月中旬) 1% (平年8.8%) : 低い(-)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 天敵の活動が活発になる時期なので，防除する場合は天敵に影響の少ない薬剤を使用する。
- (イ) 更新園では秋芽生育期に多発することがあるので注意する。



(6) クワシロカイガラムシ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 並
- (ウ) 発生時期 並

イ 予報の根拠

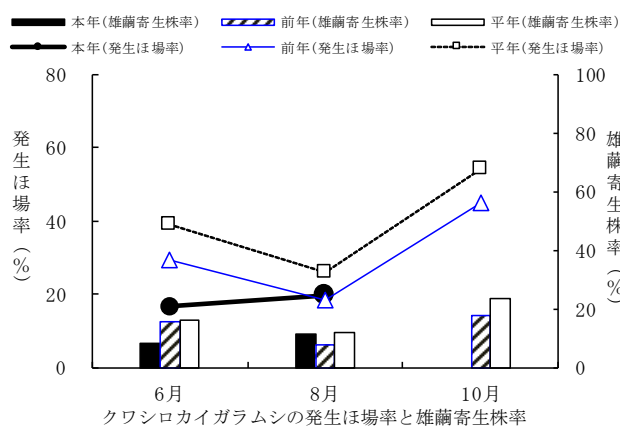
- (ア) 調査結果 発生量：並  
発生ほ場率20%（平年26%）：並  
雄繭の寄生株率11.4%（平年11.8%）  
：並

(イ) 発生時期

定点（茶業部）における第2世代ふ化最盛日（7月18日）の翌日からの有効積算温度は、8月20日現在589.0日度で、今後の平均気温が平年並みに推移した場合、第3世代ふ化最盛日は9月12日頃（前年9月3日、平年9月11日）と予測される。

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 定点ほ場でのふ化最盛日は前年より早いと予測されるが、地域によって差があるので、ふ化状況を調査し、ふ化最盛日を把握する。
- (イ) 防除は、ふ化最盛日から5日以内に薬剤が枝や株元に十分かかるように散布する。



クワシロカイガラムシの発生ほ場率と雄繭寄生株率

防除に関する今月の留意事項

1. チャトゲコナジラミ

県内本土全域で発生がみられ、一部で多発ほ場も確認されている。多発するとは場一面に成虫が乱舞し、作業性を低下させるほか、幼虫が寄生した枝ではすす病が発生し光合成能力を低下させる。薬剤防除は若齢幼虫期の効果が高く、高齢幼虫である越冬期（10～3月）は効果が低い。

- (1) 幼虫は葉の裏のみに寄生し、裾部と葉層下部に寄生が集中することから、防除の際は葉裏にかかるように10a当たり400ℓの散布量で丁寧に薬剤散布を行う。また、裾刈りはチャトゲコナジラミの除去効果と葉裏への薬剤付着性が高まり効果的である。
- (2) 本虫には天敵シルベストリコバチが有効なため、本天敵に影響の少ない薬剤を使用するように努める。



## 農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。  
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋など）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. **散布時には薬剤がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。**
6. **クロルピクリン剤は、住宅地および畜舎に隣接するほ場や、無風の時、土壤が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。**
7. ランネート剤は毒性が強いので、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬および使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

### 「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等を総合的に基づいた総合評価。
- 発生ほ場率と調査場所を記載しない発生数・発生率は、巡回調査の結果。
- 果樹と茶樹の定点防除園又は無防除園は、果樹部と茶業部での調査結果。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（＋）、（－）は、発生量の増加、減少要因を示す。
- 気象予報は、向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平年を用い、本年調査値の後に（平年○○）で表記する。ただし、過去3年間の平均値を用いた場合は（過去3年○○）と表記する。